



Title	芥川龍之介『お律と子等と』論：複雑さの中から浮かび上がるもの
Author(s)	坂井，二三絵
Citation	阪大近代文学研究. 2005, 3, p. 44-58
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92631
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

芥川龍之介『お律と子等と』論

―複雑さの中から浮かび上がるもの

坂井二三絵

はじめに

『お律と子等と』(大正九(一九二〇)年十月、十一月)について、同年十一月十一日、芥川は小島政二郎宛に次のような書簡を送っている⁽¹⁾。

「お律と子等」の批評を書いて下さった由感佩しますあれは未完でもう二三回通夜や墓の事を書かないと纏りません(今度はお絹を主人公にして)但しもう嫌気がさしてゐます

芥川本人によるこのような言及を背景として、この作品は研究対象として殆ど顧みられることはなかった。わずかな先行研究においても、吉田精一氏の「焦点が散漫で、注意が小道具に向ひすぎてゐる。その為読者の頭が始終外側にそれ、かんじんの母の死といふ中心事件が一向内面的な深い悲しみを伴つて来ない。結局描写が平面的に終つてゐて、彼の弱点をもつともあらはに示す結果を招いてゐる」⁽²⁾や、坂根俊英

氏の「この小説では母の病氣と死を中心に複雑な家族構成に置かれたその成員たちの心理的対立と親和の模様が描かれているのだが、そこには新旧世代の対立や伝統と近代の問題もからまつている。しかし、問題意識は先鋭に凝縮化されているわけではなくて、かなり薄められている」⁽³⁾のように、低い評価がなされてきた。

一方、近年、佐々木雅發氏は、これまで否定的に評価されてきた散漫な焦点や問題点の希薄さを「逆に人生のとりとめのなさ、常ないはかなさ」を描き出すための手段とし、「芥川の見えていた人生の姿」として評価した⁽⁴⁾。一見分散して見える詳細な描写の積み重ねを『お律と子等と』を支える特徴とする点で、正当な指摘であり、論者も基本的に同じ立場に立つ。なぜなら、この作品は淡々と写實的に語られているように見えながらも、同じようなことが繰り返し語られるという特徴が見られ、そこに語り手の意図を見出せるからだ。また、過剰なものとされてきた詳細な小道具の描写も、これ

と同様の目的のもとになされていると考える。

しかし、この特徴が示すのは、佐々木氏のいうような「人生のとりとめのなさ」に尽きるのだろうか。確かに、『お律と子等と』では、お律の発病によつても中断されることのない人々の日常も描き出されている。また、母の病氣や死について真剣に心配する息子達でさえも、自分自身の悩みや周りの人間との小さな衝突や葛藤のような、母の病氣と直接関係のない感情から逃れることができない。だが、この作品における非常に複雑な人間関係とその中で浮上してくる感情を全て一括りに捉えるのではなく、詳細に見ていくことで浮かび上がるものがあるのではないだろうか。

本論では、服装や住居の細部などの小道具の描写やよく似た表現の繰り返しをこの作品の特徴と捉え、それにより死に直面したお律や家族の思いがどのように描き出されているのか検討したい。

一 作品の構成と「子等」の思い

① 視点人物が移行することの意味

『お律と子等と』は、三章までは次男洋一の思いを中心として語られ、三章の末尾以降は長男慎太郎の思いを中心として語られる。(本論では、便宜上語りの中心となる人物を視点人物と呼ぶ。また視点人物の移行に従い、三章末尾以前ま

でを前半、それ以降を後半とする。) 本論冒頭で引用した芥川の書簡によれば、当初は更に長女お絹を視点人物とした(「続き」が予定されていたと考えられる。このように視点人物が移行していくことには、どのような意味があるのだろうか。

これを明らかにするために、兄弟三人の特徴がどのように語られていくのか検討したい。まず、前半の視点人物である洋一について考える。洋一は三人の中で、唯一現在の父母の実子であり、両親と最も屈託のない関係を築いてきたと考えられる。また、慎太郎の「高等学校の夏服に白い筋の制帽」

(三)(学生)や、お絹の「丸髷に結つた」(一)、「綺麗な丸髷の襟足」(三)(既に嫁いでいる)のような、それぞれの立場を示す外見的要素が、洋一については語られていない。このことは、中学を卒業し高等学校の受験準備中という、身分のない中途半端な洋一の立場を象徴している。受験への不安とやる気のなさや、自分の志望する文学に父が否定的であるという将来の不安定さは、洋一を憂鬱にする最大の要因である。だが、このような立場は、洋一が何に拘束されることもなく、いつでも母の傍にいられることを示している。

また、次に挙げる引用は、家族の中での洋一の位置を示唆している。

・賢造の先妻が、叔母の身内だと云ふ理由もある。——洋一は誰かに聞かされた、そんな話を思ひ出しながら(二)・少くとも三万円内外は損失を蒙つてゐるのに相違ない。

—そんな事も洋一は、小耳に挟んでゐたのだつた。(二)
・母が兄をつれて再縁したと云ふ事さへ、彼が知るやうになつたのは、割合に新しい事だつた。(二)

・姉は去年縁づく時、父に分けて貰ふ筈だつた物が、未だ一部は約束だけで、事実上お流れになつてゐるらしい。

—さう云ふ消息に通じてゐる洋一は(三)

これらの引用では、洋一が家族それぞれが抱える経済的な問題や深刻な人間関係に直接関わることなく、常に(話)の形で知つてゐるだけであることが繰り返されてゐる。

このように、洋一については、身分による時間的・精神的制約の少なさや、家族のそれぞれが抱える問題に煩わされない立場にあることが強調されて語られてゐることがわかる。これらの特徴は、洋一がお律の病氣に対して最も素直に、正面から向き合える人物であることを示してゐる。

一方、後半で視点人物となる慎太郎は、お律の連れ子であつたために、母に対して屈折した感情を抱いてゐる。また、慎太郎は地方の高等学校へ進学したために、現在の生活の場が実家から離れてゐる。

さらに、三番目の視点人物として予定されてゐた長女のお絹は、お律の実子でないことから、お律との間により大きな蟠りがあると考えられる。また、お絹は他家に嫁いでゐる。既に見たように、これは「丸髷」にも表れてゐるが、お絹が結婚前と変化してゐるのは外見だけではない。

お絹の夫は「短い口髷に縁無しの眼鏡と云ふ、寧ろ弁護士か会社員にふさはしい服装」(四)で、伝統を守る呉服屋の主人でありながら、都市における近代的な職業に相応しい外見を持つ。谷村博士の診断に関心を示すことから、近代的なものに価値を置く人物と考えられる。「私がさう云つた時に、御医者様を取り換へてゐさえすりや」(三)という発言から、他の家族よりも早い段階で近代的な知識を持つ医者を推薦していたと見られるお絹も、夫の影響を受けてゐるだろう。また、一日目にお絹が持参した「果物の籠」は「青林檎やバナナが綺麗につやつやと並んでゐた」(一)と描かれ、作品の中で色彩の華やかさが突出してゐる。日本において、果物は江戸時代以前から存在するが、西洋の食べやすい品種の流入と栄養面の知識の普及により、明治以降に一般化した。特に、青林檎やバナナは、新しい品種というイメージが強い。贈り物として籠に盛ることも、明治四十年前後から始まつた比較的新しい習慣である(五)。お絹は、実家への土産として、新しく華やかなものを選択したのである。ここから、嫁ぎ先の近代的な価値観や経済的な安定を実家の家族に示そうというお絹の思いが読み取れるだろう。

一方、二日目の午後、お絹は結婚以来延期されてゐる財産分与について父に交渉してゐる。母の病氣を忘れたかのやうに熱心に話すその姿に、端で見てゐる洋一は批判的である。しかし、「その方がどうかなくなつてくれなくつちや、何かに私

だつて気がひけるわ」(三) というお絹の発言は、単に消極的な父を説得するための詭弁ではない。実家からの経済的な援助は、嫁ぎ先における自分の価値を高めることになるのである。このような行動は、先の実家に対する思いとは矛盾するようだが、里帰りする娘の心理と現在の生活の場での嫁の心理として理解できるものだろう。

既に他家に嫁いだお絹は、実家にいる洋一や下宿先の慎太郎とは異なる次元の感情を抱えており、家族とより隔たった立場にある。つまり、お絹とお律の間には、実の母子でないという以上の距離ができあがっているのである。

以上、洋一から慎太郎、さらにお絹へと計画されていた視点人物の移行は、複雑な家族関係やその他の事情から母との間にある蟠りの小さい人物から大きい人物への移行であるといえる。語り手は、些細な描写の積み重ねや言葉の繰り返しにより、兄弟の立場の違いを強調し、それぞれが互いの思いを必ずしも正確に理解できないことを示唆していく。言い換えれば、『お律と子等と』は、母に対する兄弟個々の思いが、理解しやすく明快なものからわかりにくく複雑なものへ、徐々に明らかにされていくという構成をとっているのである。

②物語の展開と慎太郎の思い

洋一から慎太郎へと視点人物が移行することによって、慎

太郎の思いはどのように描き出されていくのだろうか。

母の病状の変化に一喜一憂する洋一とは対照的に、慎太郎は一見冷静な人物として語られている。子供の頃の慎太郎は「その時分から冷静」とされ、高等学校へ入学する直前の「お母さんが死んでも悲しくない」と言い、「遠くへ眼をやりながら、何事もないやうに」(以上二)歩いていた姿が回想される。また、洋一と再会する場面でも「慎太郎はやはり冷然と、それ以上何も云はなかつた」(三)と語られる。これらは全て、作品の前半で洋一の視点を通して語られる慎太郎の姿である。では、慎太郎が視点人物となる作品の後半ではどうなのだろうか。「洋一」は横から覗くやうに、静な兄の顔を眺めた「や」皆一度に顔を挙げながら、何か病室の消息を尋ねるやうな表情をした。が、慎太郎は口を嚙んだなり、不相変冷やかな眼つきをして、もとの座蒲団の上にあぐらをかい「た」(以上五)と、ここでも慎太郎の冷静さに触れる箇所では、視点が慎太郎から洋一や家族へと移動している。つまり、繰り返し返される慎太郎の冷静さは、あくまで周囲から見た印象として語られているのである。そして、表面的にはこのように見えている慎太郎の本心が明らかになつていく過程が、この作品の展開の主たる部分をなしているのではないか。

洋一は、兄が母に対して自分とは異なる感情を抱いているのではないかと懸念している。この疑いは、子供の頃の兄弟喧嘩の思い出に起因する。洋一と言いつ争う時には「語気さへ

も荒立て」ず、母に理由を聞かれても「むつつり佇んでゐるだけ」の慎太郎が、母が洋一を庇つた途端「氣違ひのやうに母を撲たう」とし、「大声に泣き出」（以上二）す。この思い出は、後半で慎太郎の回想するお絹の思い出と対応している。実際の親が兄弟より自分を軽視したと感じると「険しい目つき」を表し、声を上げて泣き、「氣違ひ」のように相手にむしゃぶりついていく、という二人の行動はびたりと重なっている。泣きわめく姉を前に、「頭の何処かには、実母のない姉の心もちが不思議な位鮮に映つてゐる」（以上六）と感じる慎太郎は、自分の思いと似たものとして、姉の気持ちを讀み取つたのだろう。彼等は、一方の親が義理であるために一層実の親の愛情を求め、時にはその愛情を疑いながら成長したと考えられる。しかし、実の両親のもとで育つた洋一には、その思いは必ずしも理解できるものではない。思い出の中の慎太郎の「口惜しさうな眼つき」は、のちに慎太郎が東京を離れる直前の「お母さんが死んでも悲しくない」（以上二）という言葉や、最近知つた慎太郎がお律の連れ子であるという事実と相まつて、兄の母への不満、あるいは憎悪の可能性を疑わせるようになったのである。

作品の前半では、母に対して冷たい感情を抱く兄がすぐには帰宅しないかもしれないという洋一の不安が度々語られる。これが解消されるのは、三章で洋一が下宿先から帰つた慎太郎と再会する場面である。洋一は、兄の眼に「予期して

ゐなかつた、とは云へ無意識に求めてゐた或感情」（二三）、すなわち母への愛情を讀み取る。そして、兄は母を愛していないのではないかと洋一の不安が解消された時点で、語りの視点は洋一から慎太郎へと移動するのである。

さらに、その直後の次の記述により、慎太郎の母への愛情はより明確に語られる。

母の死目に会ふよりは、寧ろ死んだ後に行つた方が、悲しみが少いかも知れないなどと思ひ耽つてゐる彼だつた

(三)

慎太郎の視点を通して語られる後半は、洋一との差異や共通点が語られながら、前半で不確かであつた慎太郎の本心が明らかに becoming いくことで、慎太郎の母の死に対する感情が効果的に描かれることになる。

慎太郎の行動は、先に見た母への愛情を素直に感じ表現できる立場にいる洋一のそれとは対照的である。例えば、兄弟が再会する場面では、「突然相手も忘れたやうに、飾り窓の前を飛び出し」、「両手を挙げないばかりに、車上の青年へ声をかけ」る洋一に対して、それに答える慎太郎は「眉一つ動かさ」（以上三）ないのである。

このような兄弟の対照は、母の病状に接した際にも明らかである。洋一の場合、「思はず大きな声を出した」「父の言葉を奪つた」「すぐに立ち上ると、真鍮の手すりに手を触れながら、どしどし梯子を下りて行つた」（以上一）、「叔母のさ

きに立つて、勢よく梯子を走り下りた」(二)、「賢造の言葉が終らない内に、洋一はもう茶の間から、台所の板の間へ飛び出してゐた」(三)、「お絹がさう云ふと同時に、早速長火鉢の前から立ち上つた」「洋一をさきに賢造が、そはそは店から歸つて来た」(以上五)のように、反応が早く、すぐに言葉を発する。一方、慎太郎の場合は「剛情に一人黙つてゐた」「誰よりずっと後に、暗い梯子を下り」(以上四)、「吸ひさしの煙草を捨てると、無言のまま儘立ち上つた」「口を噤んだ」(以上五)のように、その思いを言葉にすることはなく、動きも遅いのである。

しかし、洋一が「平日と変らない店の空氣」に「軽い反感」を覚える(三)ことと、慎太郎が医者診断に好奇心を示す義兄に「他人らしい無關心の冷たさ」(四)を感じることは、お律の病氣に關心を示さない人々への違和感として似通つてゐる。また、洋一が「叔母や姉と、何時までも茶の間に話してゐた事がすまないやうな心もちになつた」(一)ことと、慎太郎が「垂死の母を見て来た癖に、もう内心ははしやいでゐる彼自身の輕薄を憎」(五)むことも、母への思いに集中できないことへの罪惡感が類似している。つまり、外見的な行動パターンが対照的な兄弟の、母の病氣に対する思いは決してかけ離れたものではなく、むしろよく似たものといえるだろう。

以上のように感情を露わにすることのない慎太郎は、次に

挙げるお律の死の場面で大きく変化する。

慎太郎は咄嗟に身を起すと、もう次の瞬間には、隣の座敷へ飛びこんでゐた。さうして遅しい両腕に、しつかりお律を抱き上げてゐた。

「お母さん。お母さん。」(略)

誰もまだ其処へ来ない何秒かの間、慎太郎は大声に名を呼びながら、もう息の絶えた母の顔に、食ひ入るやうな眼を注いでゐた。(七)

慎太郎は、素早く反応し、声に出して母に呼びかける。このような行動は、ここまでではむしろ、洋一の特徴として見られたものである。この時、慎太郎は、母と一對一で向き合う。お絹は既に二階で休んでおり、賢造は店に出ている。また、夜伽をした洋一も睡眠を取るために二階へ上がり、叔母も店の方へ呼ばれていく。つまり、お律の死の場面に向けて、始終人が出入りしてゐた茶の間に慎太郎は取り残され、一人で母の死と向き合う(準備)がなされてゐたのである。そして、家族の中では見せることのなかつた慎太郎の正直な思いが、一気に表に出たのである。

また、慎太郎の帰宅後、お律と最初に対面する場面は直接描かれていない。「慎ちゃん。さつきお前が歸つて来た時、お母さんは何とか云つたかえ？」(五)と、会話の中で間接的に触れられるに留まつている。母との久々の再会の場面は物語に登場せず、慎太郎の感情の揺れを描くことは避けられ

ている。つまり、作中、慎太郎のお律に対する強い感情を描くことは最終場面まで保留されているのである。

以上のように、慎太郎の母への愛情に懐疑的であつた洋一が慎太郎の目の中に母への愛情を読み取るという前半の流れと、慎太郎が内に秘めていた母への愛情を表面に出すという後半の流れが、作品の中心的な展開となつてゐる。そして、「お律の死」というクライマックスにおいて、慎太郎のお律への感情を効果的に描くための周到な演出がなされてゐるのである。

③示唆されるお絹の思い

では、視点人物となる部分が書かれなかつた長女のお絹は『お律と子等と』の構成の中で、どのように機能してゐるのだろうか。

作中、お絹とお律が同席する場面はなく、現在のお絹の義母への態度や思いは殆ど描かれていない。作品の前半では、一日目は浅川の叔母と話し込み、二日目には父と金銭の折衝をするお絹が語られる。視点人物である洋一には、これは母への無関心として映り、反感を抑えられない。一方後半では、慎太郎が、お絹の態度から自分とお律に対する「皮肉」や「意地の悪い調子」を感じ取つてゐる。これらは、洋一と慎太郎それぞれが持つお絹に関する知識や思い出から、お絹のある

一面を読み取つてゐるといえよう。確かに、お絹はお律の病氣に対して実子である兄弟ほど切迫した思いを抱いてゐないようである。また、「きつとお母さんは、慎ちゃんの顔が唯見たかつたのよ」(五)という慎太郎への発言には、実の母子の間にだけ存在する愛情への嫉妬と羨望が窺える。

しかし、語り手は、洋一や慎太郎には必ずしも見えてゐないお絹の思いを示唆してゐるのではないだろうか。お絹について語られる時には、「何時もの鼻つ風邪」「頸に湿布を巻いた姉のお絹」(以上一)、「昨日よりも又一倍、血色の悪い顔」(三)「病人のやうな顔」(五)のように、体の弱いこと、具合の悪そうなが逐一ついて回る。

また、雨の降る中を、混み合う電車でやつてきたお絹はお律を熱心に看病してゐる。「お絹はまだ顔を曇らせた儘、急に長火鉢の前から立上ると、さつさと次の間へはひつて行つた」(二)、「其処へお絹が襖の陰から、そつと病人のやうな顔を出した」(五)といった箇所には、お絹がお律の横になる「襖一つ向うの座敷」を拠点にしていることが窺える。お絹は、多くの時間をお律の枕元で過ごし、さらに夜伽までするのである。一方、夜伽をするという提案に無関心な態度を示す慎太郎を「煮え切らない」(五)と批判し、慎太郎抜きで夜伽をした翌朝には「皮肉」な挨拶をする。このようなお絹の態度は、慎太郎の行動に母への孝行心が見られないことへの非難といえる。逆にいえば、体力的に最も弱い立場にあ

るお絹が熱心に義母を看病するのは、親孝行の思いを示すためと考えられるのである。

作中、お絹の思いが直接語られることはない。しかし、お絹に関わる描写を一つ一つ検討することで、その一端を垣間見ることが出来る。お絹はお律と血が繋がらないことに加え、既婚であることで、弟達とは全く異なる立場にある。一方、熱心な看病という形でお律への孝行を果たそうという姿勢も窺える。実の息子である弟達ほど悲痛なものではなかったにせよ、兄弟には見えていないお絹なりのお律への愛情の形が想定されていると考えられるだろう。『お律と子等と』は、互いには必ずしも読み取れていない兄弟それぞれの思いを、順に明らかにしていくことで、個々の思いをより強く浮かび上がらせるといふ構成をとっている。直接はその思いが語られることのないお絹もこの構成の一端を担っており、現在の作品でも十分活かされているといえよう。

二 お律と家族の対照性——その〈場所〉と気持ち

『お律と子等と』は、終始「子等」の側から語られ、お律の思いは直接語られない。しかし、題名にも明らかなように、作品においてお律が重要な位置を占めることはいうまでもない。ここでは、お律の〈場所〉を中心に検討し、その思いや家族との関係がどのように描かれているのか確認したい。

お律は、茶の間の奥の座敷に横になっている。「襖一つ隔てた向う」「襖一つ向うの座敷」（以上一）、「隔ての襖を明ける」（二）、「襖一つ向うの、病室」（三）のように、茶の間と奥の座敷を隔てている一枚の襖について繰り返し言及されている。お律と家族が過ごす場所が明確に区切られながら、その間にあるものが一枚の襖であるために、二つの空間は完全には断絶していない。茶の間にいる家族にはお律の唸る声が聞こえてくるし、お律もまた家族の動く音や話す声が常に感じられる場所に居るのである。

お律の看病の合間にも、茶の間では、家族が食事を取り、お律の発病をきっかけに集まってきた人々が世間話をする。また、食事の場であり家族団欒の場である茶の間は、発病する以前のお律が、主婦として仕事をし、多くの時間を過ごす場所であつたと考えられる。一枚の襖を隔てて、日々の生活や仕事の場所と、日常生活から離れた療養の場所が対置されているのである。このことに留意しつつ、お律と家族の関係を検討する。

ここで、一章における登場人物の服装の描写に注目してみると、「夏外套」「パナマ帽」「足駄」「縞絹の羽織」「夏羽織」「セルのコート」のような外出時に用いるものばかりに集中していることがわかる。また、「袖に雨じみの残っている」や「泥だらけの白足袋」のように、たった今外から入ってきたということを示す（印）も描きこまれている。一方、外套

を脱いだ中に着ている着物についての記述は一切見られない。このような描写の偏向は、慌ただしく家を出入りする人々の様子を強調するためと考えられる。また、作品を通して「うす暗い梯子の上り口へ胸まで覗かせてゐる」「どしどし梯子を下りて行つた」(以上一)、「誰かの梯子を上つて来る音が、みしりみしり耳へはひり出した」(二)、「誰かが音のしないやうに、暗い梯子を上つて来る」「彼の耳には、誰かの梯子を上つて来る音がみしりみしり聞え出した」(以上六)のように、梯子に関する記述が非常に多い。このように、家の出入りや梯子の上下の記述を通して、家族やその周囲の人々の〈動〉が強調されている。

一方、お律は茶の間の奥の座敷から動くことはない。始終動いている家族と襖一つに隔てられた場所で、お律はじつと横になっているしかない。家族の〈動〉が強調されることで、それとは対照的な、病のために日常生活から離脱したお律の〈静〉が一層引き立てられるのである。

このような中で、お律の思いはどのように描き出されているのだろうか。作中何度か、お律は家族を呼び寄せたり、自分の意志を伝えたりする。しかし、遺言や容態の悪化を予期して緊張する家族に対して、お律は病氣や死を意識したような言葉を発しない。洋一には、叔母のために「梅川の鰻」(二)をとるように指示し、慎太郎には、洋一が勉強するように指導してほしいと頼む。また、夫の賢造には、翌日着る着物の

ありかを教える。これらの行為には、健康な時のままの主婦・母・妻らしい心配りが見て取れる。家族を度々枕元に呼び寄せるのは、慎太郎が「唯父に床の側へ来てゐて貰ひたいせいかも知れない」(六)と感じるように、病床での孤独を和らげるためでもあるだろう。しかし、お律にとっては病氣の苦しさを訴えるよりも、日常と変わらない〈ふだんの通り〉の役目を果たすことが重要なのである。

これは、お律の子供達に対する接し方にも表れている。子供達の目には「一層今日は寢れたやうだつた」(一)、「さつきよりも一層寢れて見えた」(五)のように、衰えていくお律の姿が映る。にもかかわらず、お律は一章では洋一に「ふだんの通りかすかに頬笑んで見せ」、五章では慎太郎に「腹痛をこらえへながら、齒齦の見える微笑」を見せている。また、直接は語られていない婦宅直後の慎太郎との再会の時の様子も、洋一によつて「笑つたね」(五)と伝えられる。これらから、病床のお律は常に子供達に微笑を向け続けていることがわかる。慎太郎の回想の中で、「母は水を手向けながら、彼の方へ微笑を送つた」(六)という記述が見られることから、お律の微笑は、健康な時からいつも子供達に向けられてきた微笑であると考えられる。この微笑が消えるのは、死を迎える朝のことである。お律は病床に現れた慎太郎に肯き掛けながらも微笑を見せることなく、すぐ戸沢の方へ目を向けて、「もういけないんでせう。手がしびれて来たやうで

すから」(七)という。死の直前になって初めて、お律は近づく死に対する恐れと覚悟を見せたのである。

以上のように、家族の(動)が強調されることで、お律は(静)として浮かび上がってくる。これはまた、母の病氣と死を期に様々な感情を錯綜させていく家族と対照的に、平生と変わらない態度を保とうとしたお律の思いとも対応しているのである。

三 家族をとりまく人々

①家族の思いとの対照として描かれる人々

『お律と子等と』には、お律・賢造夫婦とその子供達以外にも、多くの人々が登場する。親戚である浅川の叔母とお絹の夫、家内で営まれるメリヤス問屋の従業員達とその一人である神山、女中の美津と松、二人の看護婦、町医者戸沢と博士の谷村等である。これらの人々についての記述は決して多くはないが、些細な描写を通してその個性や人柄が語られている。また、家族との心理的な葛藤は元より、これら周辺の人々の間にも、立場や性格の対照性や心理的な反発などが見られ、この作品における人間関係を一層複雑にしている。そのため、彼等がいかに語られているのかという点もまた、検討する必要がある。以下、順に見ていく。

従業員達は、店主の妻が重病でも平生と何等変わるところ

がない。いつも通り仕事をし、時に冗談めいたことをいったり、口笛を吹いたりする。店員の一人である神山は家内の用事も承っているが、やはりお律の病状を心配する様子は見られない。神山は「瑪瑙の印形」「派手なセルの前掛け」「金時計」といった派手な服装をしてそれを弄つたり、「君の清元の御師匠さんの近所じやないか?」(二)と洋一に指摘されてにやにや笑ったりする(三)。一人目の看護婦は、登場場面から「病床日誌へ近眼の顔をすりつけるやうに、せつせと万年筆を動かして」(一)おり、看病よりも事務的な作業に熱心である。翌日には「一時間もお化粧」していたこと、自身の予定を気にしてお律の「死期」を医者に見つけたことを理由に解雇される。これに対して洋一は「腹が立つて来るよりも、反って気がふさいでなら」ない。また、その直後には「平日と変らない店の空気」にも「軽い反感のやうなもの」(以上二)を感じている。

二日目の午後には谷村博士が診察に訪れ、家族に診断を告げる際には見舞いに來ていたお絹の夫が同席する。町医者の戸沢を待つ間、谷村とお絹の夫は天候や景氣のような当たり障りのない世間話を始める。この空氣に慎太郎は「妙な歯痒さ」を感じる。戸沢がやってくると、谷村はお律の「容態」の経過を詳細に説明させる。慎太郎は、「戸沢の処方」を聞いた時微かに眉を動かした谷村の反応が氣に掛かる。谷村の診断が戸沢のいう潰瘍でなく腹膜炎であったことから、戸

沢が間違つた処置を施していた可能性を慎太郎は感じ取つたと考えられる。しかし、谷村は「多分はあなたの御覧になつた後で発したかと思ふんです」と戸沢を追及せず、誤診の有無は曖昧にされてしまう。一方、「熱はずんずん下りながら、脈搏は反つてふえて来る」という病氣の特徴を聞いたお絹の夫は「我々若いものも、伺つて置いて好い事ですな」と、心配よりも好奇心を見せる。慎太郎は、これに「他人らしい無関心の冷たさ」（以上四）を感じる。翌朝、戸沢は顔死のお律を診察した後、見送りに出た慎太郎を洋一と間違ひ、それに気付くと「不快な程快活に笑ひ」出す。その後も、「宅の倅」（七）の話を持ち出しにやにや笑うことをやめない。二人の医者は対照的な人物として語られているが、家族の気持ちに寄り添っていないという点では共通している。

以上のように、家族をとりまく人々の多くが、常に自分自身の事情や関心に気を取られ、お律の病氣と関わる際にも仕事や用事の一つとして対応している様子が描かれている。お律の病氣に影響を受けることなく普段と変わらない彼等の態度は、お律の病氣に動揺する家族とは対照的である。お律を心配する兄弟は、その思いが深刻になればなる程、お律の病氣に無関心な人々との間の違和感を深めていく。

洋一と慎太郎の立場や行動の違いが強調されながらも、母の病氣に無関心な人々に対する反応に、兄弟に共通する母への感情が表れていることには、一章で既に触れた。この傾向

は、お絹にもいえるのではないだろうか。二人の医者が帰つた後、お律の体温を尋ねられたお絹は次のように答える。

「今計つたら七度二分——」

お絹は襟に頸を埋めたなり、考深さうに慎太郎を見た。

「戸沢さんがゐた時より、又一分下つたんだわね。」（五）

ここからは、体温が下がる症状がよくないという医者の診断に好奇心を見せた夫と対照的に、それを深刻に受けとめるお絹の様子が窺える。兄弟の中ではお律への思いの希薄さが目立つお絹だが、周囲の人々と対照されることによって、弟達と類似した母への思いが浮かび上がってくるのである。

しかし、『お律と子等と』において、家族とそれ以外の人々は、単純な対立関係でのみ表されているのではない。ペテラン風の二人目の看護婦は、一人目とは対照的である。彼女は、お絹が「今度の看護婦になつてからは、年をとつてゐるだけでも気丈夫ですわ」というように家族の信頼を得ており、お律が薬を飲んだことへの一瞬の喜びを慎太郎と共有するなど家族の思いに寄り添ふことができる人物である。また、浅川の叔母は中間的な立場にいる。一日目、洋一は病氣の母のいる隣室でこの叔母と無駄話をするを「苛立たし」く感じ、その後母の様子を見ると「叔母や姉と、何時までも茶の間に話してゐた事がすまない」と感じる。ここには、母の病氣と関係のない世間話をする姉や叔母への軽い反感が読み取れる。一方、翌日叔母から一人目の看護婦についての苦情を

聞き、看護婦へ電話を掛けに店に出た洋一は「彼や叔母とは没交渉な、平日と変らない店の空気に、軽い反感のやうなもの」(二)を感じている。ここでは、よりお律の病気に無干渉な人々の中に置かれたことで、浅川の叔母が洋一と立場を共有する存在になっているのである。

以上のように、『お律と子等と』には、お律の家族以外にも様々な人々が登場する。その多くは、個人的な関心や事情に氣を取られ、重症のお律やその家族の思いには無頓着に見える。彼等は、日常生活に追われながらも母の死に向き合わざるを得ない家族と対照的に語られたり、洋一や慎太郎の憂鬱や反発を誘発する存在となる。しかし、彼等の悪意は描かれず、語り手も人間のエゴイズムとして批判したりはしない。むしろ、彼等の態度は母の死と向き合う「子等」との関係性の中で語られることで、「子等」の母への思いを強調し、母の死に対する悲しみを抱いているという三人の共通性を浮き彫りにしていく機能を果たしているのである。

②美津の果たす役割

ただ、女中の美津はここまで見てきた人々とは異なる、特別な役割を果たしているのではないだろうか。

登場人物の中で、別々の場面で二度以上お律の口から名前が発されるのは、この美津だけである(「美津にさう云つて

ね。好いかい?」(一)「美津の叔父さんとか云ふ人も、やつぱり十二指腸の潰瘍だつたけれど、半月ばかりで癒つたと云ふしね」(五)。もう一人の女中であるお松の名は一度も上らないことを考えても、美津はお律のお氣に入りであり、信頼を得ていると考えられる。美津もまた、賢造と洋一の食事の時にその空気を察して無言のままであつたり(二)、お律への心配のために声を震わせる(六)など、家族と同様にお律の病氣を親身に心配する様子が語られる。

一方、浅川の叔母は、美津の美しさを「あの人は何と云つても、男好きのする顔だから」として「蔑むらしい笑ひかた」をし、お絹はそこまで露骨な言葉を口にしないまでも、やはり「妙な眼」(以上七)をする。二人の態度にはどこか棘があり、美津に対してよい感情を持つていないことがわかる。お律の可愛がる美津に対するこのような態度は、お律と浅川の叔母・お絹との間に横たわる微かな対立を彷彿とさせる。

さらに注目されるのは、美津と兄弟の関係である。物語の冒頭で、洋一は歌を作っている。父が現れたために「辞書の下に」(一)隠された歌稿は、午後になつて洋一が「机の下」の漢和辞書を枕(二)に使つたために、そこに残り残され、翌日慎太郎が発見される。「M子に献ず。……」と題されたその歌を見た慎太郎は「眼の涼しい美津の顔」(六)を思い浮かべる。「M子」が美津である可能性は高い。会話に美津の名前が出ると敏感に反応したり、美津にぶつかりそうにな

ると「妙にてれ」(三) といった、洋一の美津に対する過剰な意識が何度も語られているからである。では、「M子」としてすぐに美津を思い浮かべた慎太郎はどうなのだろうか。三日目の朝、梯子の上にいる慎太郎とお絹に気付くと、美津は「急に端折つてゐた裾を下」す。慎太郎はそこへ下りていくのを躊躇い、美津がその場を去るのを待つてから「ゆつくり」(七) と下りていく。ここからは、洋一ほどではなくても、慎太郎も美津を異性として意識していることが読み取れるだろう。

美津に宛てたと考えられる歌稿の行方と、兄弟と美津の関わりが、作品の冒頭から後半に至るまで順を追つて描かれているのである。(お律をめぐる兄弟の思いと葛藤) というストーリーの一方で、美津をめぐる別のストーリーが潜在しているかのである。そして、兄弟が美津と向き合う時、彼等は母への思いから逸脱している。例えば、洋一の「おとなしい美津に負け嫌ひの松の悪口を聞かせるのが、彼には何となく愉快なやうな心もちも働いてゐたのだつた」(二) といった感情は、お律の病気とは全く無関係なのである。

このように、美津は家族とお律の病気に対する感情を共有できる存在として語られている一方で、彼女を通して、お律の病気とは無関係な家族の間の対立や感情を浮かび上がらせる機能を果たしている。

また、もう一人の女中である松と比較すれば、美津本人に

ついても(家族と同じ立場で主人を心配する女中)とは異なる一面が見えてくる。二人が働いている場面の描写に注目すると、「櫻がけ」をして働く松とは対照的に、美津は「袂を唧へ」(以上二) て袖を卸したままの動きにくい格好で働いている。先に見たように、慎太郎達の存在に気付くと端折つていた裾を急いで下ろしている。また、お松が「銀杏返しほつれた顔」(七) と語られているのに対して、第三章で美津は「結ひたての髪」を匂わせている。以上、お松と比較することでわかるのは、お律の病気で慌ただしい家内で、思いの外美津が身なりに構っているということである。この作品では、店員の神山や一人目の看護婦に見られたように、(身なりに構う)ことは、お律への心配とは離れた個人的な関心事として語られるものであった。この点に注目することでお律を親身に心配する美津の、それとは無関係に自分のことに気をとられている一面が見えてくるのである。

既に見てきたように、『お律と子等と』は、立場の異なる兄弟の葛藤や、家族とそれ以外の人々の間にある距離感が描かれながら、それらを通して「子等」の抱く母への思いが浮かび上がるといふ構造をもっている。そのような中で、美津は、お律の病気から逸脱したストーリーを造出するという特別な役割を果たしている。彼女を介して、作品全体としては母への思いが強調される兄弟の別の側面が示される。その意味では、美津は①で検討した登場人物とは逆の効果をもたら

しているともいえよう。さらに、美津自身も、お律の病気を親身に心配する存在として語られながら、作中で個人的な関心を意味する（身なりに構う）という側面を持つことが繰り返されている。作品における役割の面でも本人の人物造型の面でも、美津は、身近な人物の病氣や死に対する深刻な思いを抱えながら、一方でそれと無関係な感情からも逃れられない人間の複雑な心理を象徴する存在として、機能しているのではないだろうか。

まとめ

以上、『お律と子等と』の孕む問題について検討してきた。この作品は、複雑な血縁関係にある「子等」の母に対する思いが徐々に明らかにされていくという構成をもち、彼等の葛藤を通してそれぞれの思いがより効果的に描き出されている。語り手は、三人の性格や立場の違いを強調しながら、互いには必ずしも見えていない三者三様の母への愛情の形を示していく。一方で、このような母の死に対する悲しみへと集約されていくストーリーの中にも、母に対する思いに必ずしも集中できていない「子等」の一面も描かれている。

芥川の作品の中で、死を中心的な題材とするものは他にも見られる。『枯野抄』（大正七（一九一八）年九月）では、師匠の死を前にした弟子達それぞれの利己的な思惑が描かれてい

る。また、『一塊の土』（大正十二（一九二三）年十二月）では、身内の死にある種の喜びを感じてしまう浅ましさがクロースアップされる。『玄鶴山房』（昭和二（一九二七）年一月）では、病氣の玄鶴を中心とした家族間の葛藤が描かれている。しかし、玄鶴の葬式の場面で、妻や娘の気持ちは描かれることはなく、玄鶴の死に対して強い思いを抱く人物は登場しない。

『文章』（大正十三（一九二四）年三月）では、上司の死に全く悲しみを感じていない「彼」の書いた弔辞が、家族の涙を誘ってしまったことへ感慨が語られるが、ここでも、具体的に家族の悲しみは描かれない。これらの作品では、他人の死に親身になれず身近な人物の死に際しても猶わき上がるエゴイズムと、それと共にある人間の孤独が、冷静で、時に皮肉な視線で捉えられている。そして、そのような人間への鋭い視線こそが芥川作品の特徴として評価される傾向にある。

『お律と子等と』においても、これに通ずる人間の本質に触れる記述は随所でなされている。だが、この作品では、周囲の人々のお律の病氣に無関心な様子や、母の死と向き合いながらも時にそこから逸脱していく「子等」の感情に焦点が絞られてはいない。例えば、一見些細な脇役である女中の美津に注目することで浮かび上がるように、さりげなく語られるものである。このような方法が、この作品に低い評価が与えられてきた原因の一つであろう。しかし、『お律と子等と』においては、人間の本質的な心理を炙り出すよりも、複雑な

人間関係の中で揺れ動く「子等」の思いを現実味あるものとして描き出そうとしている。そして、複雑に錯綜する感情の中から浮き彫りになっていく、「子等」の母の死に対する悲しみに重点を置いて語ろうとするところに、『お律と子等と』の主題と特異性がある。

注

(1) 『芥川龍之介全集 第十一巻』(岩波書店、一九七八)より引用。また、本文は『芥川龍之介全集 第四巻』(同、一九七七)により、作者の「書き直し」を採用した普及版を用いた。なお、旧字は適宜新字に改め、ルビは省いた。傍線は稿者。

(2) 『芥川龍之介』(三省堂、一九四二・十二)

(3) 『芥川家族小説一斑——「お律と子等と」「庭」「雛」——』(広島女子大学国際文化学部紀要) 一九九七・三

(4) 「お律と子等と」私論——「点鬼簿」へ——(『芥川龍之介文学空間』翰林書房、二〇〇三)、初出は『芥川龍之介「お律と子等と」から「点鬼簿」へ——(日本的優情)(日本的感性)——』

(『早稲田大学感性文化研究所紀要』二〇〇二・三)

(5) 昭和女子大学食物学研究室『近代日本食物史』(近代文化研究所、一九七二)によると、「(稿者注：明治)三〇年代の終わりにころには、くだものを進物にすることが一種の流行のような状態を呈した。きれいな籠に入れて贈る習慣も、日本ではこのころから一般化」し、大正前期になっても、みかん以外の果物

は「いつでも庶民の口にはいるわけではなく、いろいろなくだものを自由に食べられるのは、上流階級か一部の人たちだけであつた」という。

(6) 平出鏗二郎『東京風俗志』(富山房、明治三十五(一九〇二年)。ただし引用はちくま学芸文庫、二〇〇〇)には、普通常磐津・清元の「師匠は婦女にして、(略)夜は俱利伽藍紋の兄い。お店者の青瓢箪等の出入り夥しく(略)女師匠に対して、稽古以外にある意味を懷いて通い来るといふ義より経師屋連といふ、また蚊の紳名あり」とある。「清元の師匠」についての洋一との会話を通して、遊び人でまたそれを自認している神山の人柄が示唆される。

(7) 「(稿者注：女中のお峯は)三言とは呼ばれもせず帯より先に櫛がけの甲斐くしく(樋口一葉『大つこもり』明治二十七(一八九六)年)「赤い櫛を十文字に掛けて、上り口の板縁に雑巾を掛けてゐる十五六の女中」(森鷗外『青年』明治四十三(一九一〇)年)「櫛を外して盆を持つたお時(稿者注：女中の名)を相手に」(夏目漱石『明暗』大正五(一九一六)年)のように、一般的に女中は櫛を掛けた姿で描かれていることが多い。美津の描写は、特異といえるだろう。(引用は、『樋口一葉全集』(筑摩書房、一九七四)、『鷗外全集』(岩波書店、一九七二)、『漱石全集』(岩波書店、一九九四)。

(さかいふみえ／本学大学院博士後期課程)